を検討しなければいけない。

熊本県における野生ニホンザルの分布調査
——未確認地を中心に——

藤井　尚教（尚絅大学）

1982年以来の調査で，川辺川流域と阿蘇南外輪山一帯の野生ニホンザル集団の分布がほぼ解明できたので，未確認地域として残っている①芦北郡芦北町，②鹿児島県境（水俣市～人吉市），③，宮崎県境（人吉市～水上村）の３地域において，生息調査を行った。なお，集団の存在がすでに確認されているのは，③宮崎県境のなかの錦町大平を中心に生息する太平グループのみであった。

調査期間は1989年７月から1990年１月までで，１か月に１回，２泊３日の調査を，１地域につき２回行った。

調査結果　①芦北郡芦北町：　町内の吉尾地区の北側の松山に戦後までサルの集団がいて，よく鳴き叫んでいたが，松山が伐採された後，姿が見えなくなったとの情報を得ることができた。しかし現在では，サル集団の生息情報はどこにも存在せず，ハナレザルの情報しかない。

②鹿児島県境（水俣市～人吉市）：　水俣市久木野地区及び人吉市久七峠の調査を行ったが，ハナレザル情報しか得られなかった。　これらの地区では，針葉樹林化が進んでいて，集団が生息している可能性は低いと思われる。

③宮崎県境（人吉市～水上村）：　人吉市から，上村白髪岳，多良木町槻木，水上村市房山と江代山の調査を行った。上村白髪岳から以東の水上村まではサル集団が生息するという情報はなく，すべてハナレザルの噂だけであった。

一方，白髪岳以西においては人吉市からえびの市に抜ける国道221号線沿いの人吉市芝笠地区に1988年からサル集団が現れて，猿害を引き起こしていることを確認できた。さらに芝笠においてこの集団の一部をVTRに録画することができ，個体数を約30頭と推定した。

ところが，1989年11月16日15時30分にこのグループが人吉市上小川内谷で発見された時，その30分前にそこから約６km離れた錦町曲がり谷でもうひとつの集団が確認されていたのである。この後者の集団は先述の大平グループであるが，新しく発見された前者をここで段塔グループと命名しておく。今後段塔グループによる猿害がどのように推移するかが問題である。

ニホンザルの分布と個体数と生息環境

水野昭憲（石川県白山自然保護センター）

白山地域は，霊長類の分布地としては，きわだった多雪地といえる。ニホンザルが遊動する標高400mから800mでも，最深積雪２mから５mになり，積雪期間は約５か月に及ぶ。この雪が，ニホンザルの遊動と個体数変動に大きく影響している。

１）分布の拡大と被害の発生

長谷部（1923）等によれば，1920年代までは，白山周辺の山麓に広くニホンザルが分布していたことが分かる。その後，焼畑の敵として，また食用や薬用に捕獲され，1950年代には手取川の支流尾添川流域と，庄川の支流尾上郷川流域の多雪地でほとんど人が入らない地域にだけ残っていた。

1960年頃に，薪炭が売れなくなって，山中で行われていた炭焼と焼畑が急激に衰退した。幅数kmにわたって人とサルの間に緩衝地帯ができていた。動物愛護思想の普及や観光地化により野犬が駆除されたことなどから，サルが村落周辺を恐れなくなった。当地方でも1985年頃から，晩秋に畑作被害が出るようになった。

２）冬の遊動域の変化

1990年３月まで，手取川流域の野生群，12群について，群れ構成を確認し移動を追跡した。近年，個体数が増加し，冬の遊動域が下流方向へ広がる傾向にある。この冬にはタイコＡ１群とクロダニ群が手取川を渡り，鳥越村へ移動した。1965年以降現在までに約10kmの低山方面への分布の拡大が見られた。

３）個体数増加率

白山のニホンザルでは，大雪の年にアカンボウの高い死亡率がみられる。1987年以降，比較的雪の少ない年が続いているので，アカンボウの死亡は少なかった。そのために，長期間の個体数増加率は，過去に報告していたものから大幅に修正することになった。1970年のまとめ（河合ら，1970）以降継続して個体数が追跡できている３群の個体数の合計は，20年で3.3倍になった。

奥地の積雪期間が長いところを遊動する群れよりも，低地へ遊動域を広げている群れのほうが個